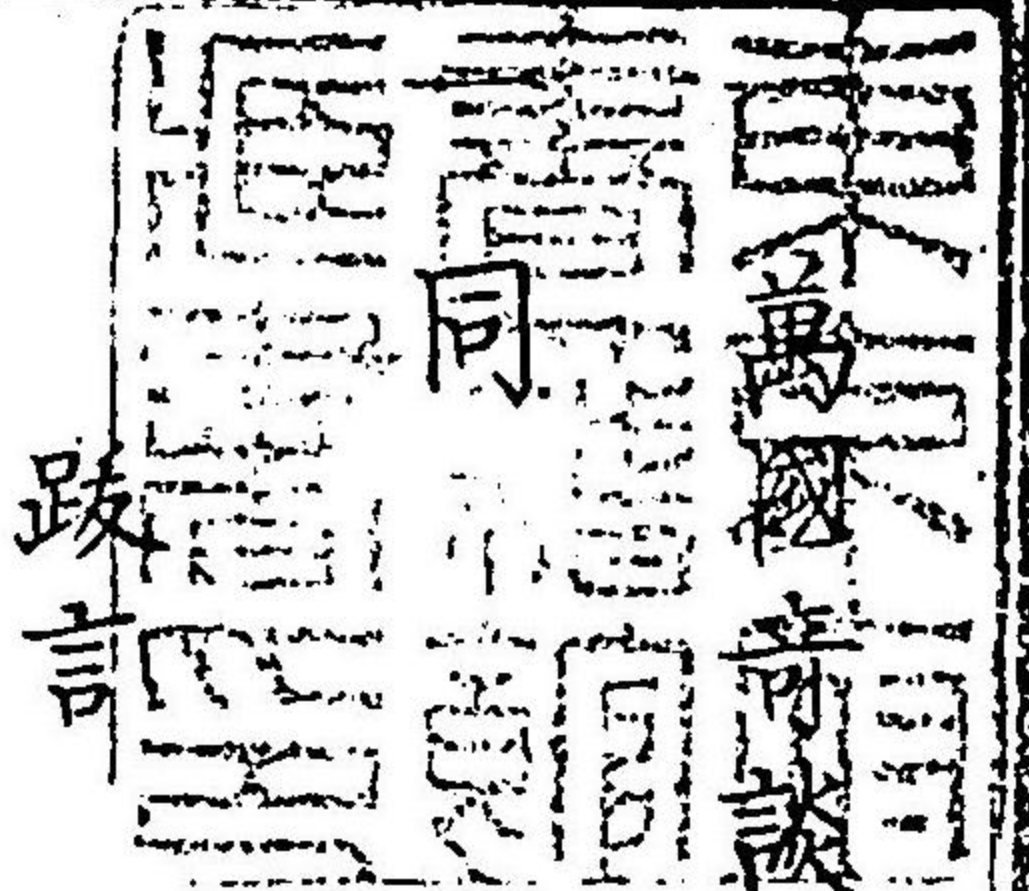


特31



初編二冊出来

二編三編嗣出

余曾て洋書を閱む際一奇事を見まは之を  
録しまた一奇談を聞きを従て記し漸く積て一  
大巻となす其中より珍奇異事等極免て多し故  
よ今其中より就てまう大古の景況を顕し又現今  
の開化人智の靈妙あるを示し以て人心を開発



せし免んと之を初編に綴り珍奇異事等を二編  
 とあり稿既脱を然るゝ学友沢田氏よりテン  
 ソウセルド、ウオンドルフル、シリングス、オズ、ウ  
 オルツ之を並訳しきルハ世界中心ノ一と題せし  
 一奇書を得あり其中に奇異あり事極免  
 て多し故に之を抄訳し二編三編に加之其發兌  
 近きにゆれバ看官宜しく二編三編に至て真  
 一珍奇異談を知り玉ひとらん

編者 誌

萬國奇談卷之二 一名世界七不思議

青木輔清 纂輯

○英國倫頓地下蒸氣車鑛道の事

往古に西洋諸国もて今の如く蒸氣車杯の工  
 風も知るべ故に富貴の人々平日馬車を所持し  
 遠方へ到る欲又急用の時々此馬車より往來せ  
 しが貧者馬車を所持する者も能ハするもの



皆乗合車として旅行したり是もて日本の駕籠等に比ぶれば遙々便利ありきもの其費用も少くなり  
 べ其上時刻の費も少くなり其のりしは彼国の  
 千七百八十五年我ハ天明五年前あり英國の人ワ  
 ツトとゞ者鑊瓶の水沸騰て其蓋を吹上る力ヲ  
 より蒸氣機関を發明してより其便利昔日は百  
 倍せり

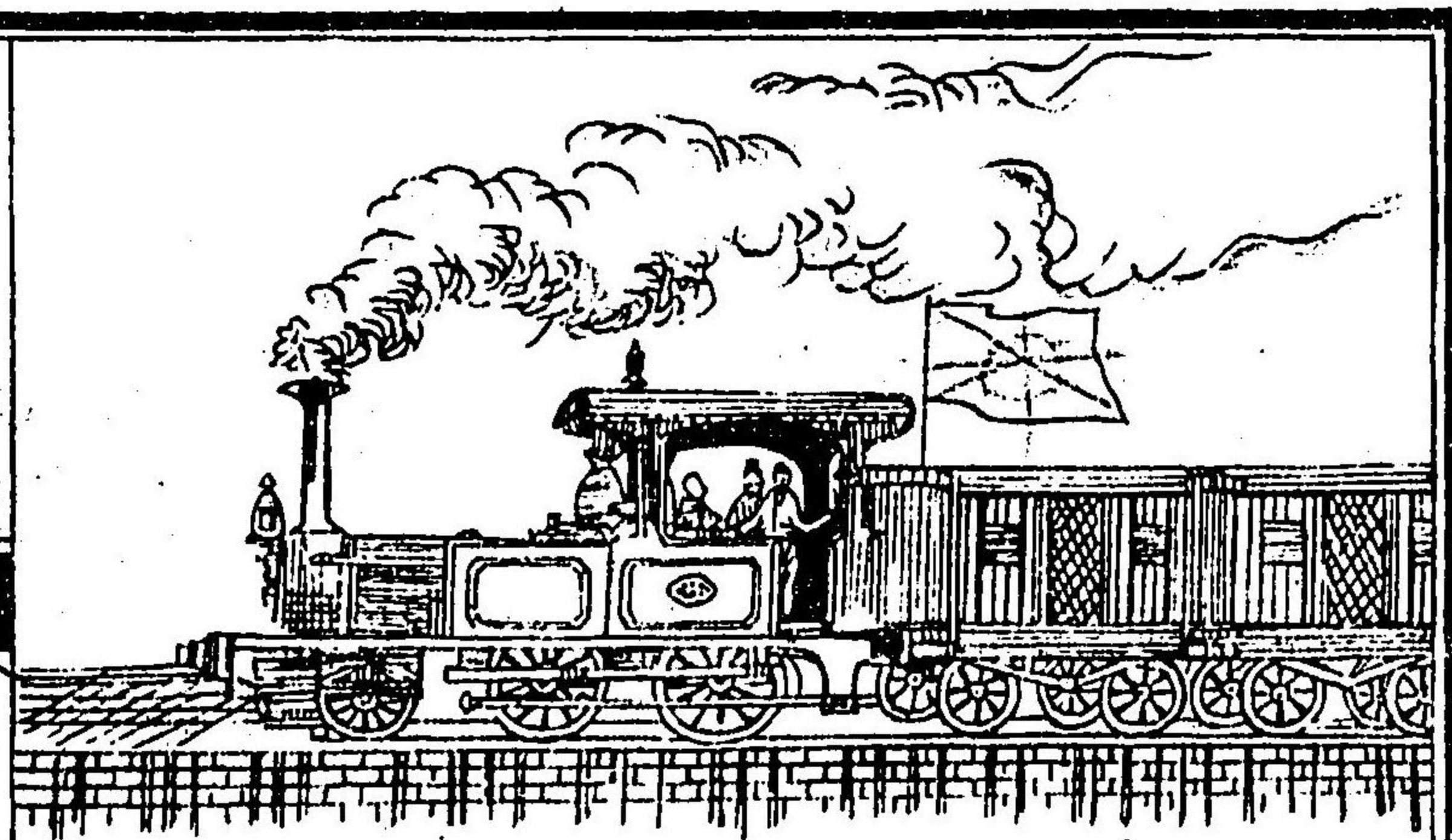
此蒸氣機関とハ石炭を以て湯を沸し其湯  
 氣の吹出る力を器械ニ移し其機関の活用はよ

て船を走らし車を飛せ川を浚ひ水を汲み山  
 を掘り田を耕し銅鉄の荒金を製鍊し毛綿の糸  
 繩を紡織し材木を鋸り木器を造る等其他何夏  
 により皆蒸氣を用ひざるものあり職人を唯  
 機関の運轉を注意するのみなりも手足を勞せば  
 一人の力を以て数百人の働きをおさ

蒸氣車も即ち此湯氣の力を以て走る車あり先  
 一輛の車は蒸氣の機関を仕掛け此車一輛は  
 客二十四人乗の車三四十輛を引く其製作は至



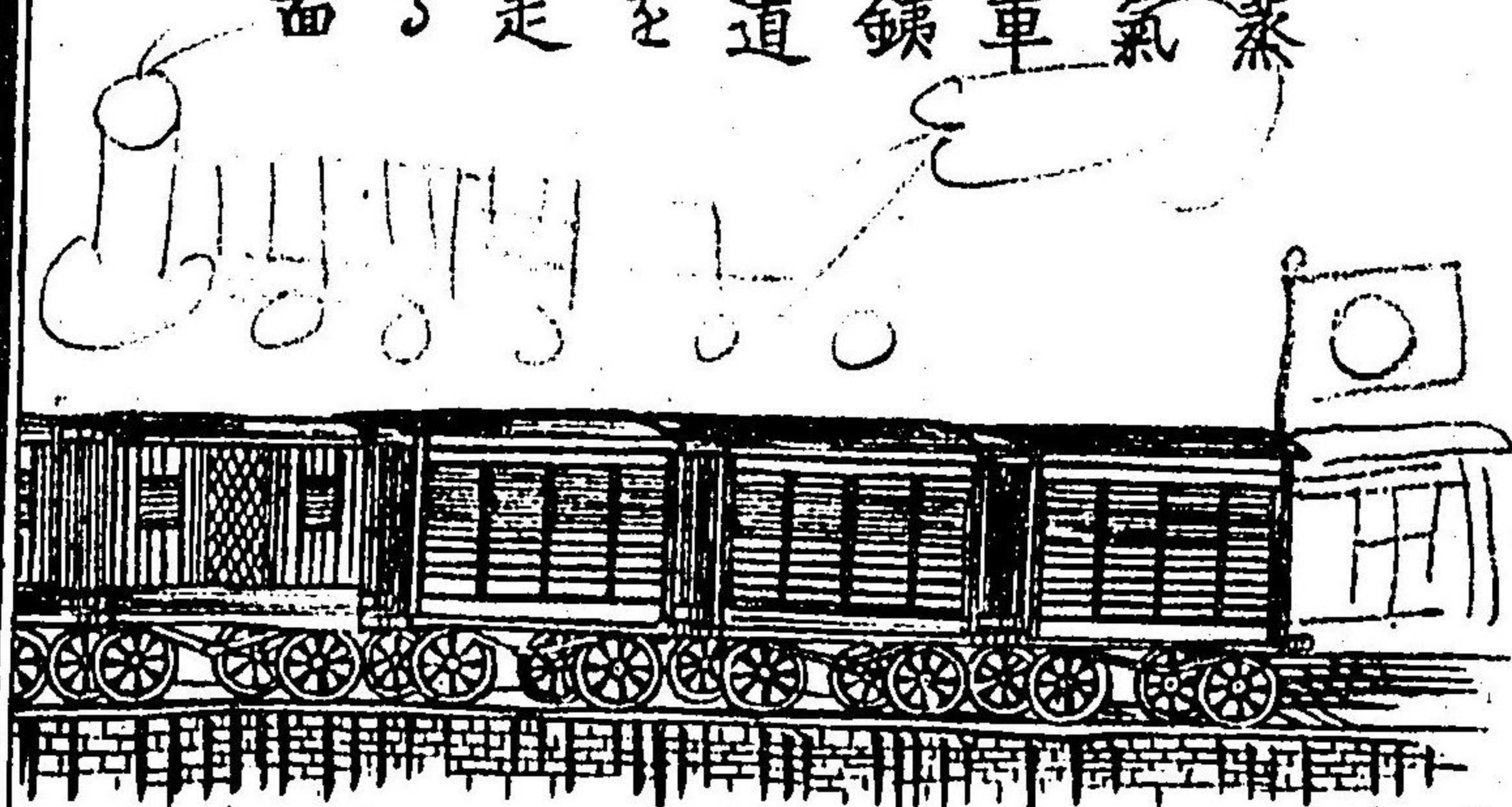
Japan Reike



Rail Road carr

抵平地あれバ日本一里  
 小付三方兩道くかゝる  
 とりふ此蒸氣車を斯く  
 重大の物あまどり蒸氣  
 のかよよつて走る故よ  
 其迅速事蒸氣船の速  
 ろあるも尚遠く及ぶべ  
 うも例の早さあて  
 一時は三十里位急用の

蒸氣車鑛道を走る番



Rail-ladd-train

て手固く車一輛毎に四  
 の鑛輪をて走る故に尋  
 常の道を行く事鉄道に  
 よつて之が為よ道を平  
 坦よ一車の輪の當る所  
 小巾二寸厚さ四寸許の  
 鑛線二條を埋免其上を  
 往來之を鑛道とつふ  
 此鑛道を作る入用大



時々一時は五十里余走るといふ  
斯く便利のみのあきを次第は感あり今も  
羅巴諸国および北亞米利加杯を就中国中縦横  
は鉄道を造り恰も蜘蛛の糸を張る如く少く  
更な旅行の勞もあらず數百里の路を往來するも  
猶隣家を行か如く其便利あるあはと實は筆紙は  
濁るを憂うるに日本もてを東京より横濱までの  
鉄道最早大抵落成し日々五度づつ往返を各々  
自ら試て其便利あるあを察し玉ひ昨日漸は

聞くる傳信機蒸氣車の如きも今日を吾家前を  
往來し實は開化の神速なる學問の功能あるあ  
を以て知る處に就中も驚くべきを近頃英吉  
利の首府倫頓ありて造る地下の鉄道あり  
倫頓を世界第一とせしむべき廣大なる都を其  
場未より中央の繁華ある場所へ至るといふを調  
度東京もて四谷赤坂或は品川千住邊より日本  
橋邊へ至る如く其道は遠く往返の勞も少く  
然るも西洋の風習もて繁華の場所あり問



屋其外大商人の見世を其主人を始免番頭手代  
諸職人とも大抵場末に本宅有りて朝に見世は  
往夕刺之本宅に返る者多し故に是迄を乗合車  
有りて其便利を助け随分都合よき変りし  
化の進むに随ひ便利の上にも便利を貪り此乗  
合車にては尚不便ありと云ふ説起り蒸氣車を  
用ひんとせしが市中に鑛道を造らんを人家  
は取崩され其場所を以て遂に地の  
下鑛道を造る莫く決し数年の工風して漸く

彼国の千八百六十三年当年前より成就した  
り此鑛道出来てより往來多し第一時刻を費  
さば賃錢も至て少りれ其便利を喜ぶ者  
あく衆し人も夥しく是を造りし社中も随て利  
益を得るものと夥しと云ふ  
此鑛道拵方の大略を往來の地面より深さ大約  
二丈余の処を上下左右とも石にて疊て宛て  
空洞の如きものを作り其底に鑛道二條を設け  
蒸氣車を往返せしむるあり且此蒸氣車の通

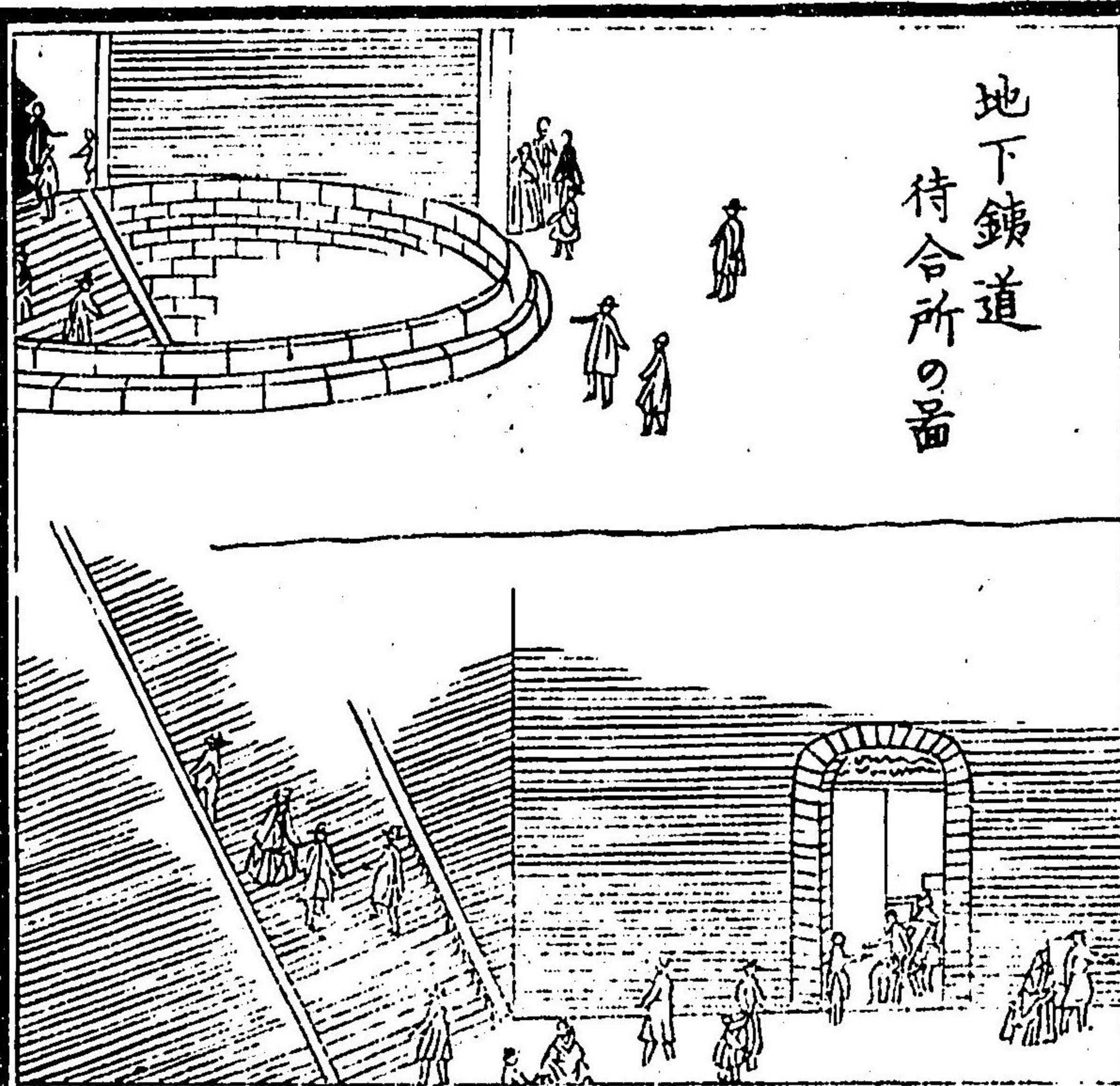


筋も色々待合所を設け此所より地の底まで上り下りする様は石段を造りたり故に之に乗んと思ふ時を最寄の待合所に至り其乗る先の速近より夫々の代料を拂ひ切手を請取りて車に乗込先の上り場にて此切手を返すあり此車を大抵五ニール位に往來するゆゑ先の車に乗後れたりと五ニール程待合をせぬは直後後の車来るあり假令バ淺草より品川までの鉄道を其間五六ヶ所も待合所を

設けたるゆゑ淺草より品川まで乗る人よりりまゝ兩國邊にて下る者も有り又兩國邊より乗組て京橋邊まで行くも有り實に便利ありとあり車を賃錢を上中下の三等に分ち上等ハ腰掛花麗ある蒲團を敷き下も花毛氈杯を敷たり中等も之順少しく下のみ下等に至りて敷物も粗ざれども其直段に至て廉し車の中も機関車の石炭を焚く場所より直ち管仕掛してガスを引き燈を照す故に地下



地下鑛道  
待合所の番



してり甚だ明  
 るく新聞紙を  
 讀みながら行  
 人多し日本よ  
 り英吉利へ脩  
 業へ行きたる  
 人の嚚を聞  
 日々学校へ通  
 少く往返とも

此車に乗りと其寓居より学校まで其道法  
 日本の五十丁程ありしが大抵九ミニート許  
 て達せしと日々の夏ゆゑ其代料を一々拂  
 煩ハ一度々澤山切手を求めれば其直段も  
 余程安き故に半年分一度に求置き之を待合所  
 みて掛りの者へ見せ車に乗込あり其代半年分  
 して三兩二分一朱許ありと  
 地下鑛道此の如く便利あり故に益之を感  
 て倫頃中を縦横に通ぜんときり然るに此鑛道



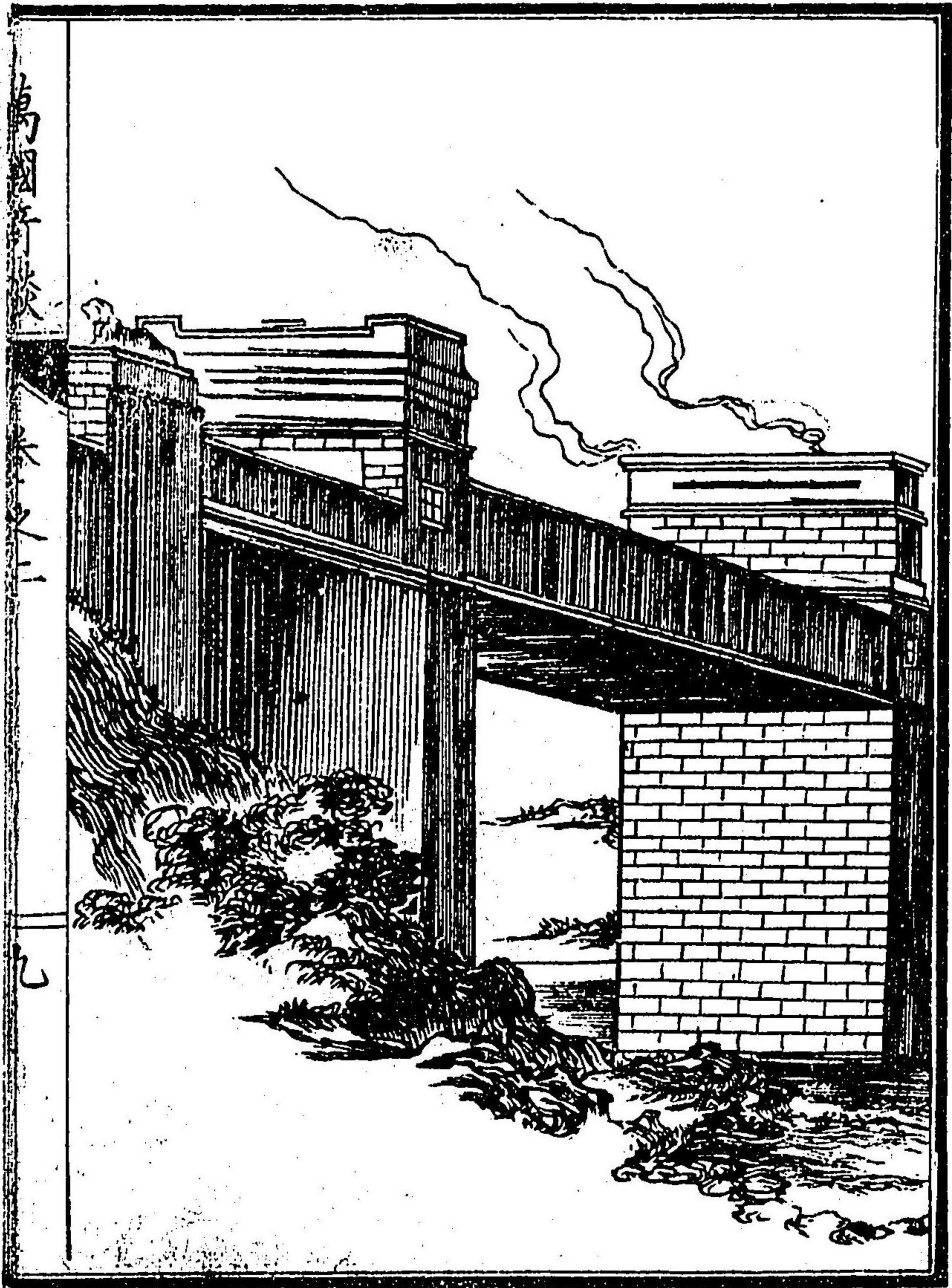
も最初を往来の妨げを恐れて地下に造り、  
 段々感あゆむに従ひて地下まで、故障は  
 以て更に此鑛道の下に鑛道を造りたり、  
 實に近  
 夏の奇觀人力の及ぶ所廣大なる此を以て察べ

○英吉利鑛管橋の支

英倫威勤士、蘇格蘭、愛爾蘭の四ヶ国を総称して大  
 貌利太尼、大英國と云ふ所の威勤士の内  
 南の岸にセワセノと云ふ府あり、人口四万五千

交易盛の場所にて製造物も随分山あり此地  
 の西岸に近く三百間余の海峡を隔て安各勤塞  
 と云ふ島嶼あり、此間を兼尼岐と云ふ此処に貌  
 利太尼鑛管橋と称せり、世界第一番の橋あり、此  
 橋は高名の建築家スタフェンソンと云ふ者の考  
 えて全く鍊鑛にて函の形に造り、其内は蒸氣車  
 の道あり、其長さ三百七間余、其下大船の往来を  
 障げん為る、其高三十二間、許練火石を以て築込  
 め、柱は三箇を以て之を支、内部の幅二間

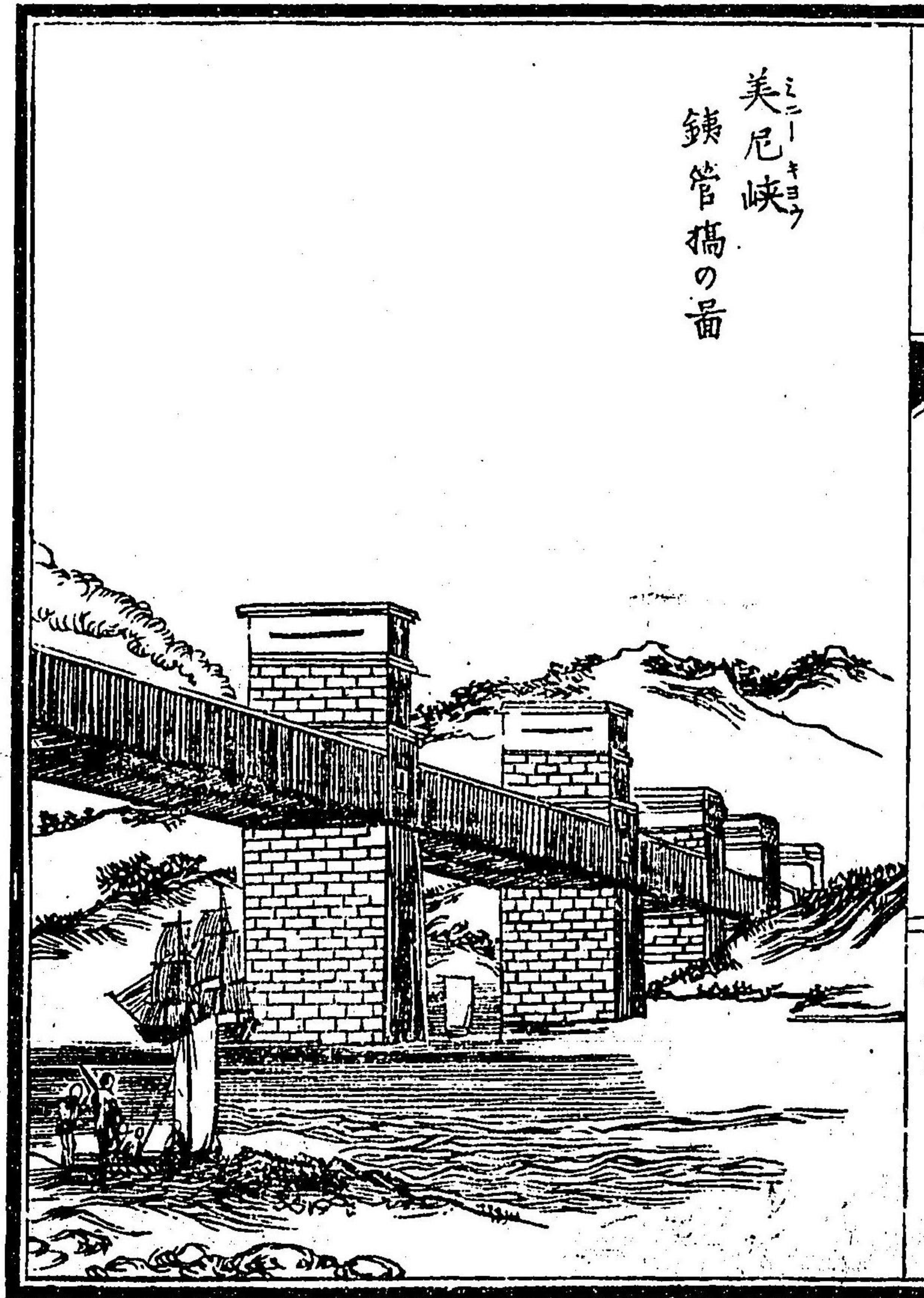




鳥園新談

卷之二

九



美尼峽  
鑛管橋の畠

鳥園新談

卷之二

八



一尺高さ四間二尺此両翼檣の袂に巨石を以て築き臺に上り其上に巨大なる獅子を居らしむ其獅子の長さ二丈五尺六インチ高さ一丈二尺六インチ廣さ八尺余其重量八十噸ありといふ此獅子を支ゆる石礎二千四方尺全橋を支ゆるの石百四十万四方尺なり此管橋の鍛鍊の重量一万噸に比し其相方の名鑄鍊の重量千四百噸其練火石の柱の最も長き一の水面上より二

鑄鍊の橋



十四丈余此橋を建築するの諸入用六十万一千八百六十五ポンド ポンドは金貨の名 乃至れりといふ此普請を彼国の千八百四十六年四月十三日工を創四ヶ年の星霜を経て漸く千八百五十年前より二十三年七月二十九日又至て落成し同



年十月二十日より往來を實に天下の巨觀といふ  
ふ登しす。此橋を並びて鑛鎖橋と称する鑛の  
鎖より釣多し。橋りり是す。奇絶あり

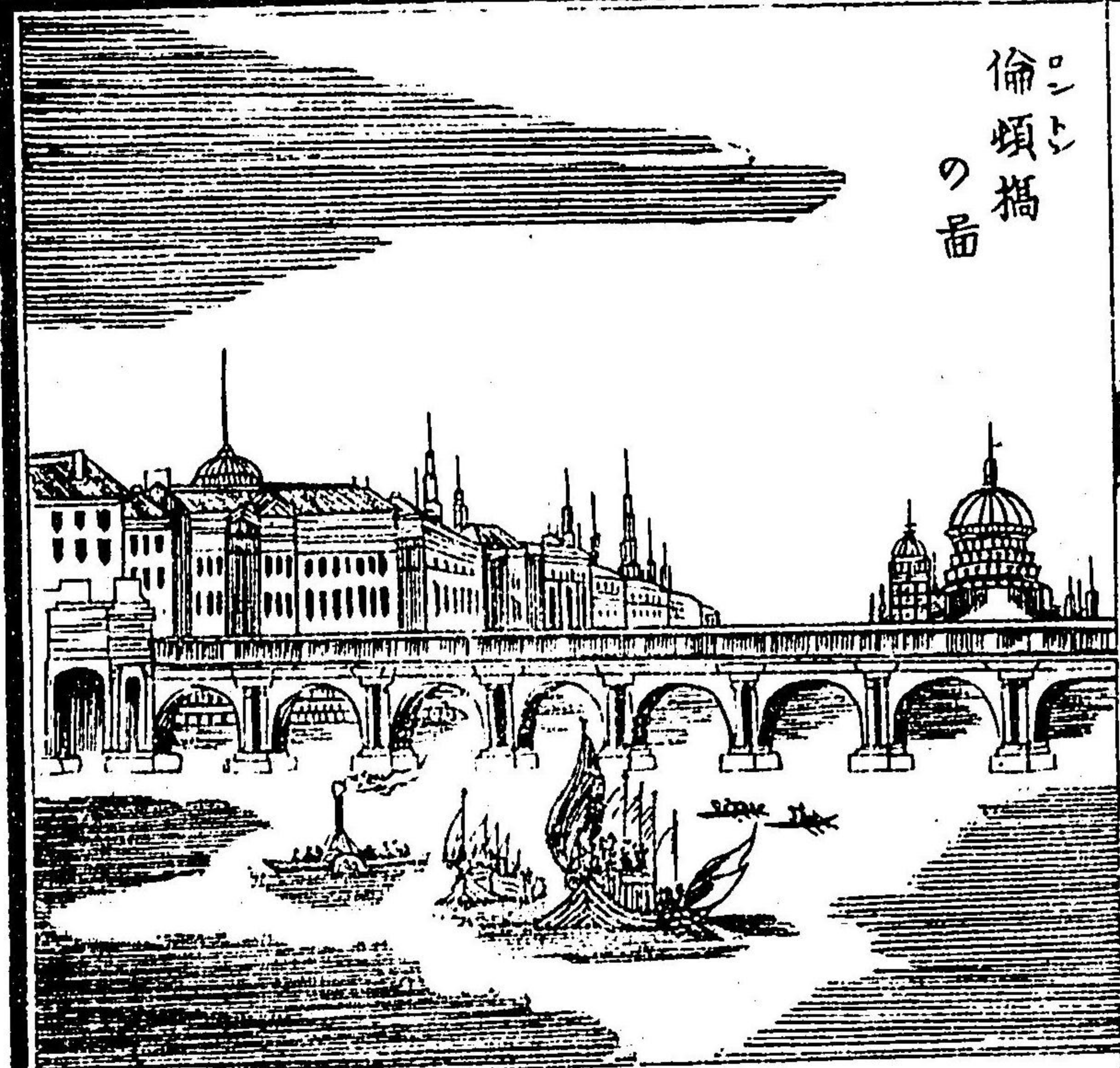
○方今世界中の五大業  
其一 倫頓川底の往來

前章より既よりへる如く英吉利の首府倫頓を  
世界第一番ともいふ。大都會より大瓦家屋  
の建續き多し。地を計りて東西七里南北五里より

下より之を一里四方の坪敷にせられハ三十五坪  
あり此倫頓府の中央にテムス河とリリ  
大河りりて西より東に流れ倫頓の府を河北河  
南の二大部に分つ殆ど日本東京の二州河の如  
し方今此河に七つの大橋を架て南北の往來  
を便し。然し往古より只一所に木の橋を架て僅  
に歩行の往來をかせし。破損多きを以て彼國  
の千二百九年に至りて始めて石橋を直し千七百三  
十年の頃より漸々其数を増加して遂に今日の



倫頓橋の番



七六橋と云れり左の如し第一を倫頓橋と云ふ其長さ九十二丈八尺其中五丈四尺一八百二十五年第六月業を起しみま御影

石を以て造営し千八百三十一年第八月に至り落成り其入用大凡二百方ポント凡我六百一近しと云ふ又倫頓橋を通行する人数馬車等を合して一昼夜五万人と下と云ふと云ふ第二をサウスウルク橋と云ふ其長さ七十丈八尺あれハ石の柱にて架多る鏝橋にて彼の千八百十五年第四月工を始免千八百十九年落成と其諸入用八十萬ポンド凡吾万兩の金高ありと云ふ

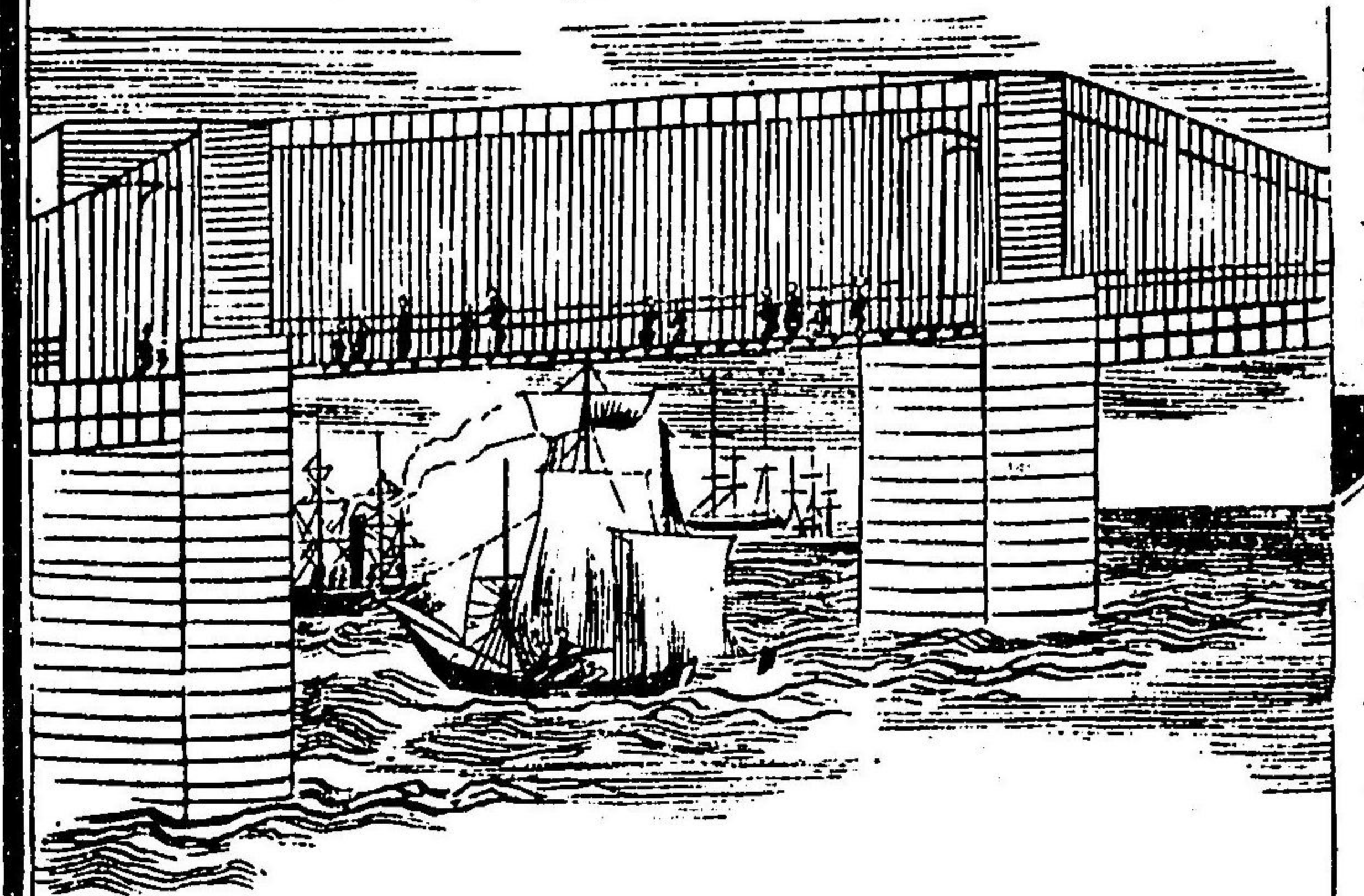


第三をブレッキリアス橋と云ふ其長さ九十九  
 丈五尺其巾四丈二尺の石橋にして千七百六十  
 年第十月工を起し千七百六十九年第十一月落  
 成を其入費用十五万二千四百八十ポンド九百  
 五十カヒ十四百ありと云ふ  
 第四をワートルロー橋と云ふ之を世界に名高  
 き橋にして其長さ百三十八丈其中四丈三尺皆石  
 して築架し端より端に至るまで一様平面とし  
 て少し勾配あり是を千八百十一年工を起し

千八百十七年第六月十七日落成せり此日を  
 即ちワートルロー戦争の第二期の日と當ま  
 りを以て其名を附ふりと此石橋を架すの入用  
 凡百万ポンド凡吾三百ありと云ふ  
 第五をサスペンション橋と云ふ是掛橋の義あり  
 此橋を河底より石を層立て支ゆるの非  
 して河中二ヶ所より高く石塔を築き此塔の上  
 二条の鍔の鎖を通して兩岸に繋ぎ其下は平面  
 たる鍔橋を架け鍔の糸金を以て橋と鎖とを繋



掛橋の畚



じより釣多しもの  
 あり其長さ百三十五  
 丈二尺千八百四十一  
 年始て工を起し千八  
 百四十五年第四月漸  
 く落成せ其入用十一  
 万ポンド凡吾三十三万  
兩程あり  
 ありと此橋を馬車の  
 通行を許さば只歩行

の往來のみあり

第六をエストミントン橋と云ふ其長さ百二  
 十二丈三尺其中四丈二尺の石橋にて築造の入  
 用四十万ポンド凡吾百二十  
万兩あり 余諸橋中にて最  
 美麗の名あり一日橋の上を通行せしものを計  
 りし車六千七百三十九輛馬三百四十匹橋の  
 下を過る蒸氣船百五十七艘なりと云ふ  
 第七をオリクスホール橋と云ふ其長さ七十九  
 丈八尺其中三丈六尺の鍍橋あり



前より、倫頓橋の下流二里の處、チームス  
 トン子此と、世界は比類なき河底の地道  
 あり、斯う大土工を企て、由来を尋らば、倫頓橋の  
 下を河水最も深くして、大小の船艦皆走り込  
 柱林立して、倫頓の港とし、よき河あり、此  
 邊は橋を架す時、船の往來を妨ぐらば、故に橋  
 を用ひ、びして、兩岸の通行をなさんと、数年工夫  
 を費せしが、良策もあく、打過千八百二十五年、  
 至て、ブリー子ルと、よき者偶トレドと、よき虫

の水を、燄で、孔を穿つを見て、忽ち一法を發明し、  
 河の底を穿ち、道を造らば、虫の木を、燄で、漸々  
 孔を穿つ、如く、よきを、遂に、此岸より、彼の岸に、達  
 して、橋の代用を、なせ、あつと、疑ひ、あつと、乃ち、工  
 を起し、河の底は、高さ一丈九尺、巾一丈二尺の、洞  
 を、二条、併べて、之を、穿ち、漸々、穿らば、随て、上下  
 左右を、煉火、石、して、層立、漸く、進て、遂に、成就せり、  
 其形状、丸も、管の如く、洞の内、よき、瓦斯燈を、引  
 て、明を取り、日輪の光を受べ、よき、尚、白晝の如く



テリス川  
の底地道



萬國行談 卷之二 一五

十

あるが故に洞中へ居るものへ自ら其洞ありし  
とを覚へざれども能く考ふる時を頭上へ数丈の  
水有て大魚其中に遊び大船其上を往來するの  
大河に身々水底のまゝ其底に在るあり実  
に奇と云ふべし此土工を世界開闢以来の新工  
夫あれど度々仕損ト等なりて金を費をこし  
夥しく又不意に河水侵入で人命を損ぜし  
もす多し是を千八百二十五年第三月工を始  
免其後三年を経て河水の侵入しよりて七年

萬國行談

卷之二

一五



の間中絶し千八百三十五年第一月より又再興  
 を謀り前後都合十五年よりして成就せり其長さ  
 凡我々二百間余其入費六十一万四千ポンド  
 二百八十西あり程あり実天下の大業と云ふ  
 此洞道出来てより往來の便利を論を俟ば然し  
 通行の者の一人より付一ペンス五厘程あり宛の  
 運上を取るとも其高一歳より一万五千兩に過  
 して漸く修復の費を償ふのみと云ふ

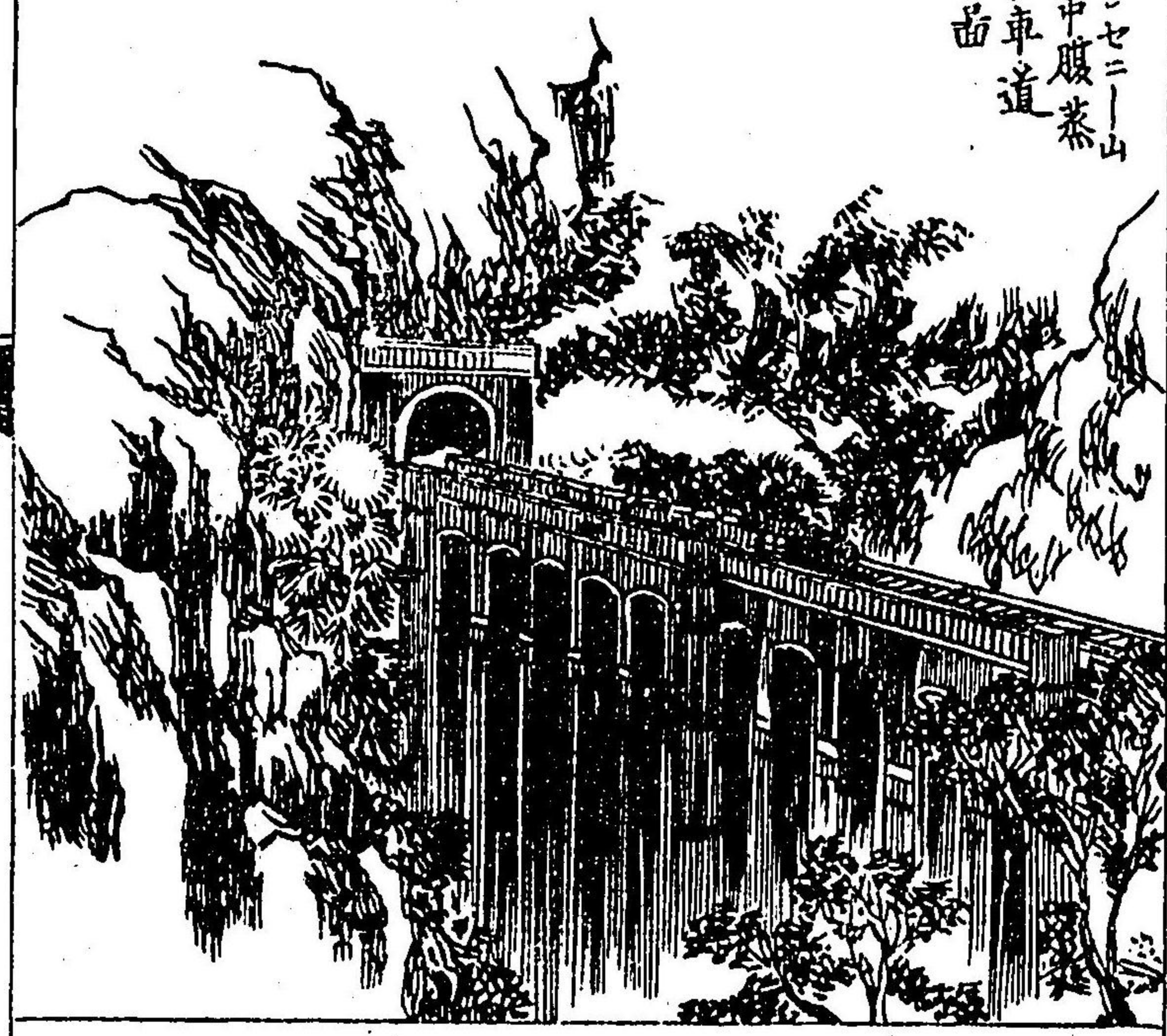
○其二 モンセニール山の鑛道

歐羅巴洲の内佛蘭西を萬人の口端よりと稱する  
 世界中より一番二番とも云ふべき學問諸藝等  
 四隅より開延り便利の上より便利を謀り國中  
 ンダも蒸氣車傳信機等の通ぜざる地も亦  
 程の国あり又此佛蘭西国の東より以太利といふ  
 国より是れ學問の盛るる国として萬里佛蘭西  
 も劣らば皆商賣を励む佛蘭西より往來して



く交易をあらたに然るに此西國の界も峻峻の山嶽駢列て牛馬も通る往來甚だ不便あり斯る開化の民は些少の事も便利を貪る風儀故入費を厭わば通路を便りせんと数年目論見たまとも皆堅牢き岩山して鑛道を設くべき地勢よりざりしが二十年前よりモンセーと名く山麓より洞穴を穿ち以太利國と自由の通路を開くんとて漸く八九年前に至る更なる新種の器械を發明し堅牢き岩を穿ち通る

モンセー山  
の中腹蒸  
氣車道  
の面



るの術を得遂  
マトニ子ルと  
とん英吉利  
川底洞道の様  
あは仕掛を以  
て山の腹に洞  
道を貫く事直  
徑三里余其中  
に鑛道を通る



てナリシとシテ府ヲ建シ昨年全ク成功ニ至  
 り以來兩國往來の便利ありハ今辨解を俟バ其  
 業の廣大なる之を驚ラズハ者ありト是方今世  
 界五大業中の一ありトシテ

○其三 スーエツの地峽堀割の良

スーエツの地峽トシテ地中海と紅海とを遮隔ス  
 所の地名トシテ即チ亞細亞洲と阿非利加洲と  
 の境界をリシ此地峽の直径を僅ニ日本の三十

里許ヨリ此所を通船セテ西洋ヨリ直ニ日本支  
 那等の東洋ニ來キトモ此地峽ヨリ中ニ西洋と  
 東洋との通路を隔絶ス余義あり喜望峰廻リ  
 とテ阿非利加大洲をぐるりと廻リ漸ク東洋ニ  
 出テ日本支那等ニ來ル然モ此喜望峰ニ風  
 波激烈ニ破船の害モ多キ故大抵人々トエ  
 ツの地峽ニテ上陸リ蒸氣車ニテ此地峽を越シ  
 荷物トシテ喜望峰を廻リ其不便ナク  
 夥シク往昔ヨリ之を鑿開キ西洋ヨリ東洋



船路并喜望峰廻ノ圖



新割振峽 地工ス





へ航海するの直路を造るの議論屢々行はるる  
 とも遂に果さば其後千七百九十八年より至り  
 蘭西国の帝拿破崙も之を企測量司を遣て地中  
 海と紅海との水平を測量せし免し大に誤ま  
 りて西海の平面高低の差は凡三十二ヒート我  
 間ニ尺五ありとせしゆ遂に行あはせばし  
 寸程ありとせしゆ遂に行あはせばし  
 止む其後千八百四十六年より同七年に至るの  
 間英吉利佛蘭西奧太利埃及の四箇國条約して  
 復々此舉を起さんと各國より測算司を撰び遣

し西海潮度水平を測量せし免し其差異甚だ  
 些少あきば此企大成をばし決し多れども未  
 だ果さざりしが千八百五十四年より至り佛蘭西  
 國よりヘルジナンデレセツプスといへる一奇  
 男子出て此舉を果さんと西洋諸國を遊歴し埃  
 及國の副王并し倫頓の英吉利巴里斯の佛蘭西の蒙  
 商に説諭し忽ち一會社をりせり之をスーエツ  
 カナール、コムペニー  
 河會社と云ふ地峽溝と云ふ此  
 會社より此佛蘭西人を撰て溝割の主宰とあり

THE SUEZ CANAL



此工を指圖せしむ但し此邊々甚だ熱き處ゆゑ  
 飲水乏しけきハ先ス工ツよりガガゴと  
 りふ地に至るまで二十五里許の間溝渠を造  
 り子ールとワハ河を導て飲水を自由とせしよ  
 り各国の人々次第に移居し往々寒寥き村も漸  
 々繁華の市とありしや土民を雇ひ牛馬駱駝  
 等を用ひて土石を運輸び又種々の奇巧な蒸  
 氣機械を發明し北の岸の地中海と南の岸の紅  
 海と波戸を築き夫よりして南北の岸より或

ハ地を掘り或ハ河を撈ひ次第に鑿て内地に入  
 り湖のりく処之々手寄り数年を経て遂に一  
 大溝河を造り地中海と紅海とを開き通し新規  
 通船の路を開く其長さ凡九十九里九里半程  
 ありし其深さ二丈六尺巾々其処よりつて差  
 異らきども大抵岸の上を二十四丈六尺河底を  
 二十三丈八尺とを充り幸しして此地峻中々々  
 小湖五つありしゆゑ稍々溝渠の手間減り多  
 々似たりども其創業より十年余の星霜を経遂



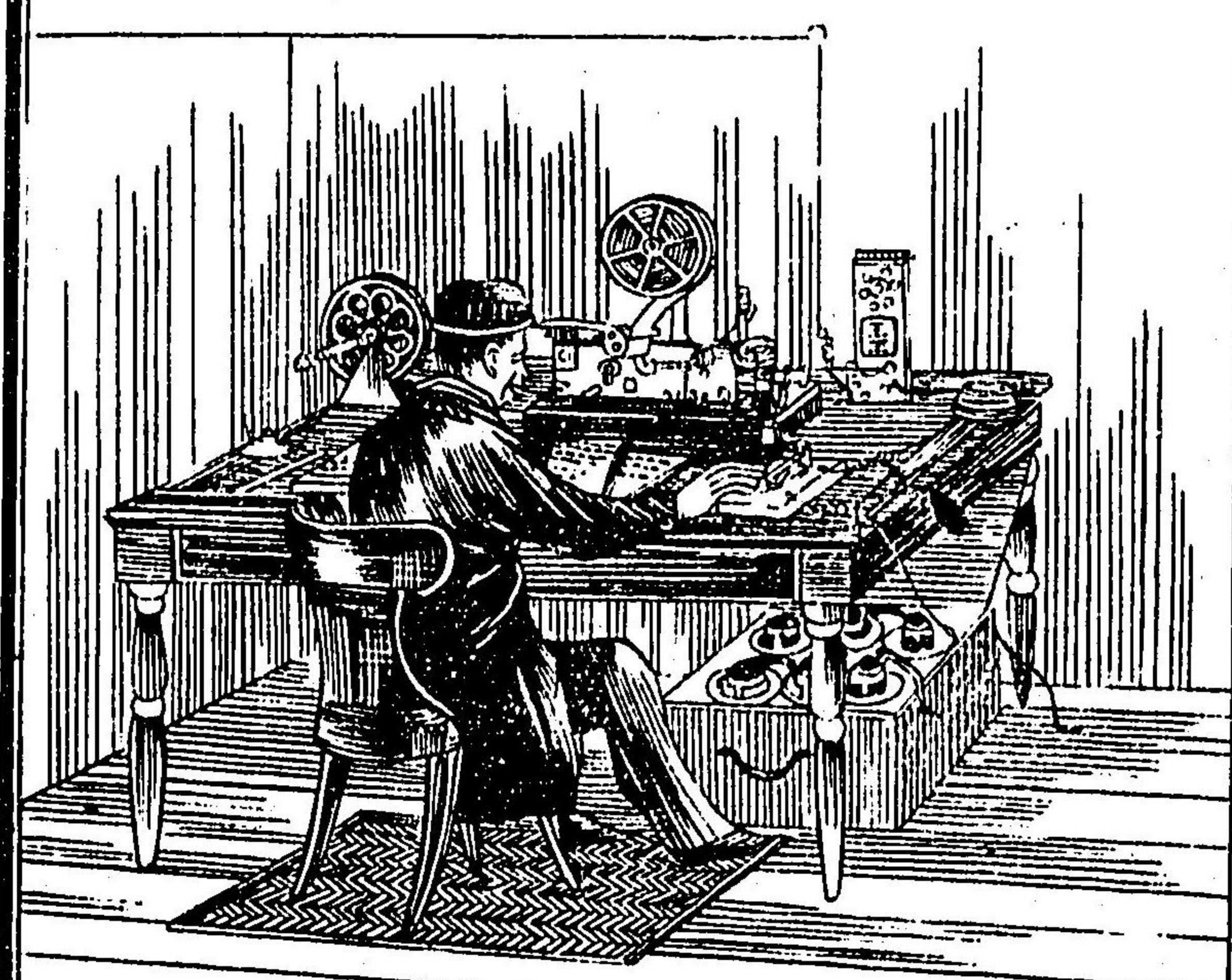
我ガ明治二年二月ニ至テ大成一英國の軍艦  
 始テ通航セ一以来万国の船舶の往來絡繹とし  
 て絶了間あく此堀割出来テより喜望峯の遠廻  
 りを去る船もあく皆直ニ西洋と東洋とニ往來  
 するゆゑ万国其便利を得るものと筆紙ニ盡し難  
 一実ニ大巧業と云ふ也一○此地を元來埃及國  
 の領分故英吉利佛蘭西の二國より埃及國と条  
 約を定む其略左の如し  
 一此土木終て以来九十九年の間を此地會社の

支配マ一テ港稅地稅等皆會社の利益とあり  
 て以後々埃及國ニ讓る也  
 一毎歲得る處の利益百ヲ付十五々會社より埃  
 及國ニ納む也一

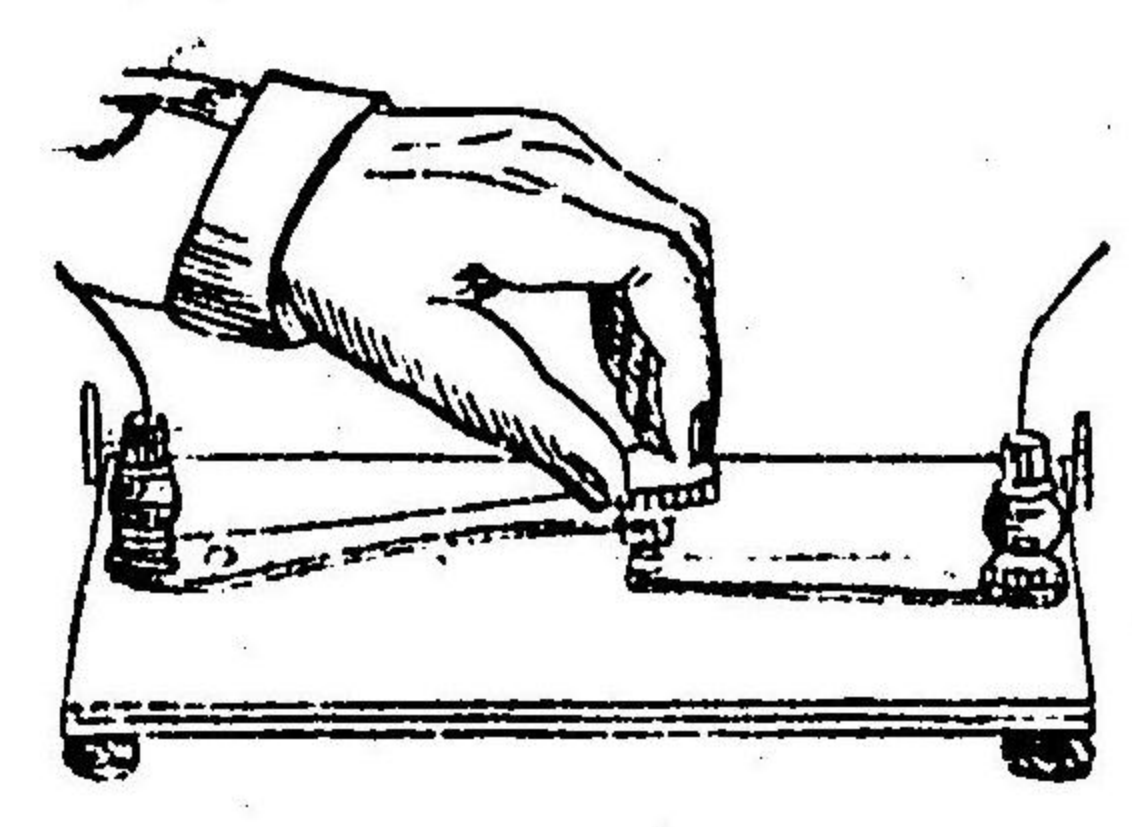
尚條約を長けまども此書中強て入用の  
 事柄も何れも之と略す



傳信機にて音信を傳ふ



傳信機の内越盛と傳ふの器



○其四大西洋海底傳信機の支

傳信機と云ふ越列機篤兒と云ふ氣の力を以て音信を遠方へ傳ふは仕掛を以て此越列機篤兒の事を往古より日本支那等も其理を知る者も少く因て其訳を解きし書物もあはれは今急に覚識んとするも六箇一朝夕の說明がごとく其理の



大略を云へん扱越列機駕兒とを総て萬物の體中一固有の一の氣として平常を隠れて陰の氣ふんども一度陽の氣一觸を其氣表一頭つきて絶大無邊の働きを呈せ然一

萬物のうち一越歷の氣の多きものと寡きものとりり脂類蠟類硫黄硝子杯を別して多し故は是を以て猫の皮等を強く摩擦し

て後一輕き物一近寄るに忽ち輕き物を引寄る是則ち越歷の力あり又極暗き處にて前の如くまれば光々火花を出る是又越歷

あり雷鳴也即ち越歷して陰の雲と陽の雲と近より觸るを其氣を起し前の猫の皮を摩る理合して電を発し其鳴る越列機駕兒の力の宏大ありと雷を以て知るべし



一雲高けまば遠く雷鳴を聞くのやがせと  
 雲低き時々其氣地は届きて家根を打滅し  
 或ハ大樹を打折る等大あゝ害をなす事  
 り無知の愚民等々之を神の怒り杯と思ひ  
 或ハ番獸と云ふ猫の如き獸降る杯と云ふ  
 者りまども能く考究登し真に其獸堅き屋  
 根又大木の上へ落あを忽ち未塵とありて

死し屋根を抜き樹を折るの謂あり  
 傳信機は此越歴の働作して譬ハ東京より  
 横濱までの傳信機あれハ先東京と横濱と

一前後の圖の如き仕掛を置き其道筋三四  
 十間ありと柱を立て高さ八九尺の所に銅  
 の糸金を掛け此より彼を通り置き前の仕  
 掛の如く越列氣を此糸金を通せれば距離



の遠近小拘りくらば其氣忽ち感動して千萬  
 里と雖ども一瞬の間は遠く下の器の如く  
 針は動氣を傳へて紙よりいり：は等の

記号を書き其用を便む又當時は紙をいそ  
 はを書て置き針の先の指を処の文字を讀  
 て往き其用向を達せしむ  
 越列機篤兒を傳信機を用ゆるハ彼千七百

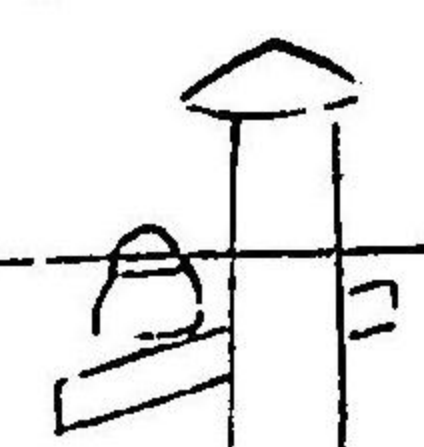
七十四年今十年前七十佛蘭西の人レ、カシと  
 りふ者の工夫あり此人工夫を起して  
 越列機篤兒の術次第は開け之を大仕掛

て實用のものに成りて千八百三十七  
 年亞米利加の人モールスとリッ者五年の  
 研究より大に發明したまひる貧乏より  
 て之を仕掛り此資金をりぎれハ合衆国



府政府又願ひ三百兩を得て千八百四十四年合衆国の首府華盛頓よりバルチモールとワシントン府まで十七八里の間、線を通し

府の音信を通し多し抑も之を世界中傳信の始と云ふ又千八百五十一年英吉利のドールとワシントン地より佛蘭西の海岸まで大凡十四五里の路の間の海底に線を通し



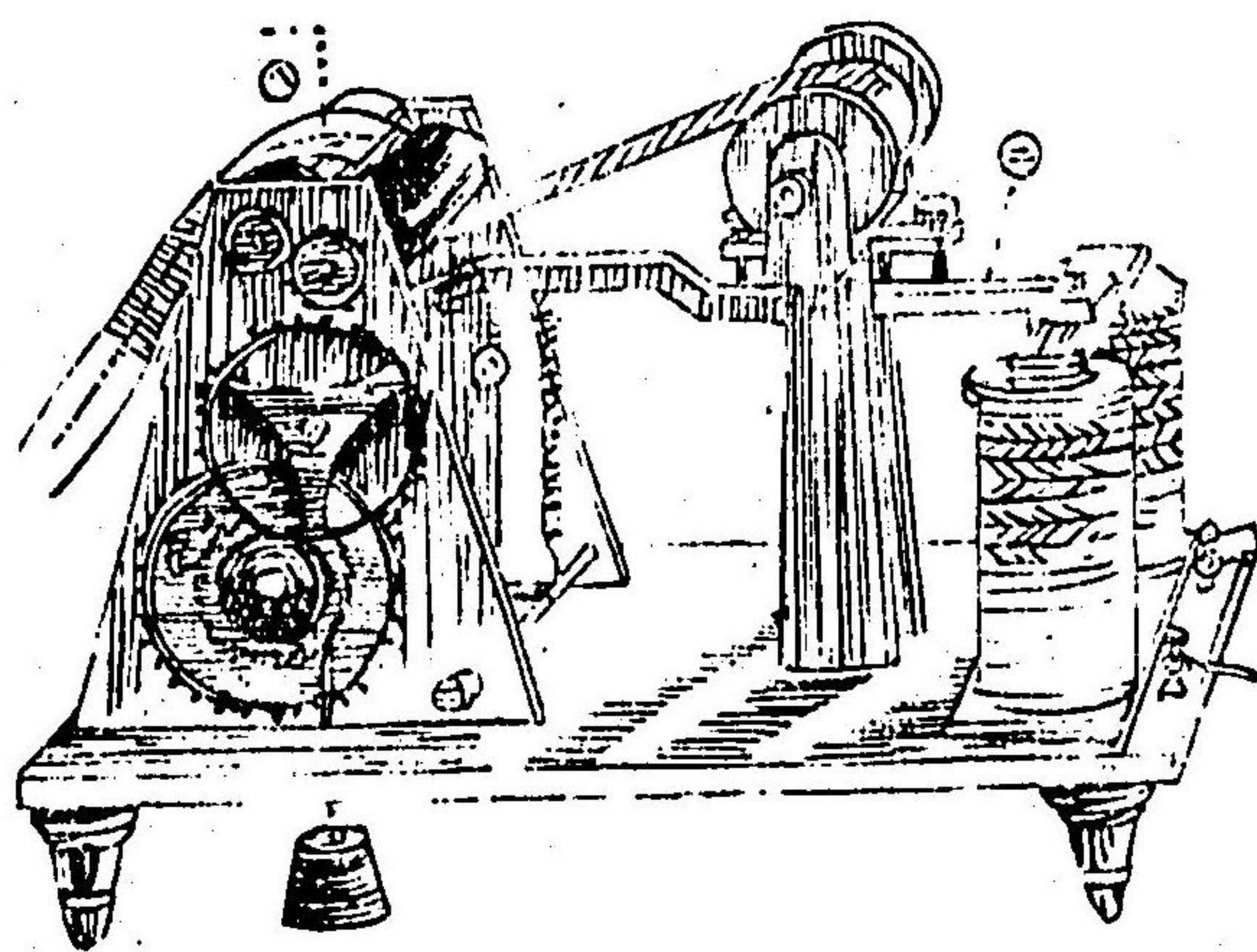
多し之を海底傳信機の始と云ふ斯く水底に沈むるの銅線の周囲に樹の膠汁を塗り水を防ぎ多し是を捲き入用陸のもの此ハ一

里まで三百兩位水底の線々一里まで四千里位掛るとりよ又人々を驚然驚愕と云ふ大西海洋海底傳信機是あり其大略左の如し



傳信機仕掛の圖

前ノ仕掛ニテ...  
ハ其動氣ノ糸鋼ニ來リ  
横木ノ動カシ其動氣ノ  
針先ニ傳ヘ紙ノ  
リット記号ヲ書キ其ノ  
用向ヲ便ス

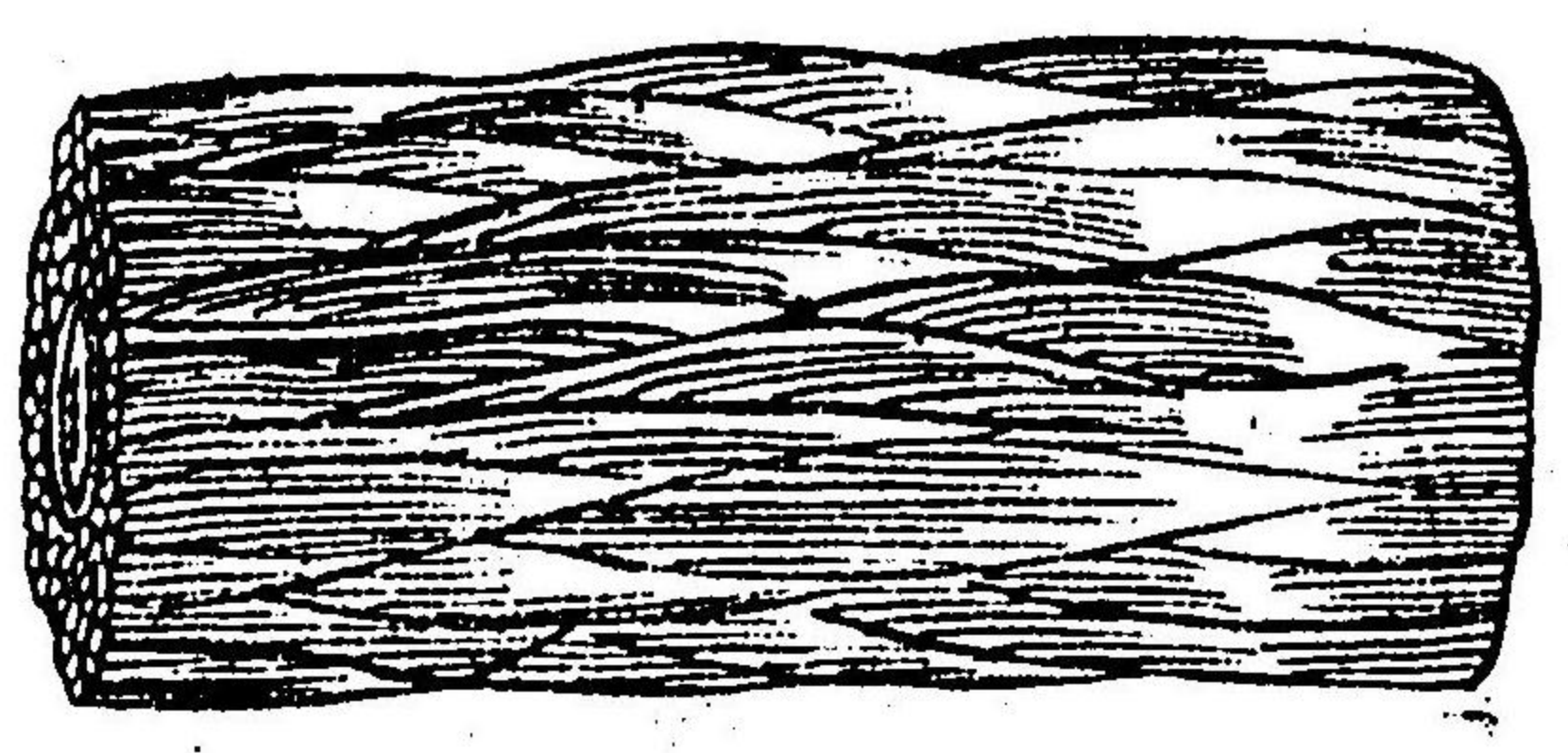


大西洋と亞羅巴と亞米利加之間、  
洋として其廣き殆と二千里、  
り然るに此海中へ傳信機を仕掛  
米利加之間の日々の音信を便利  
此海峽を測量せし幸あり、  
前後して極めて深き所、  
就き盡して百方力を盡し、  
一千八百五十八年より工を始  
蘭のバレンチヤとソム港より起  
西に向て



大西洋を越て北亞米利加の一嶋新著嶋のチ  
 リニツチとワシントン港を其距離大凡我が九百七十  
 五里の間其海底に傳信機を装置し各鎖を沈め  
 漸く成就し少く用向を便し程なく此鎖鎖漸  
 くと以て久しく廢し大業も空しく無用のもの  
 とありしが尚奮勵して智術を研究し千八百六  
 十六年に至り再び之を企銅鍊七條を中真と  
 其線ハ皆樹の膠汁にて塗堅免外は鍍線を組  
 んだる組數條を以て其外を包むと晝の如く一本の

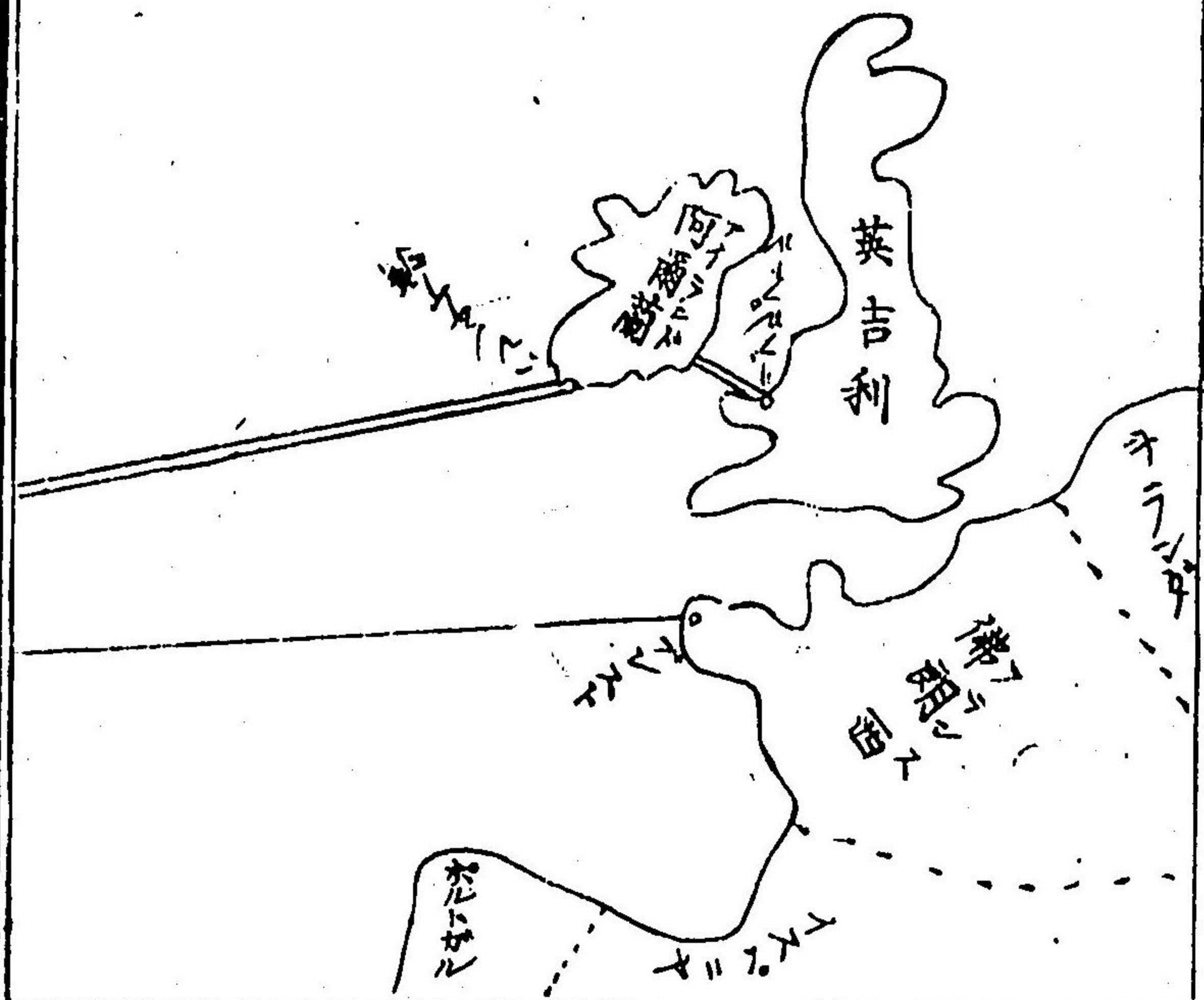
大西洋傳信機  
索の晝



大繩とガク之  
 一ステルと  
 リハ世界第一  
 番の大船此の  
 出事を編み  
 て運び更ふ之  
 を施し速く大  
 成は又その時

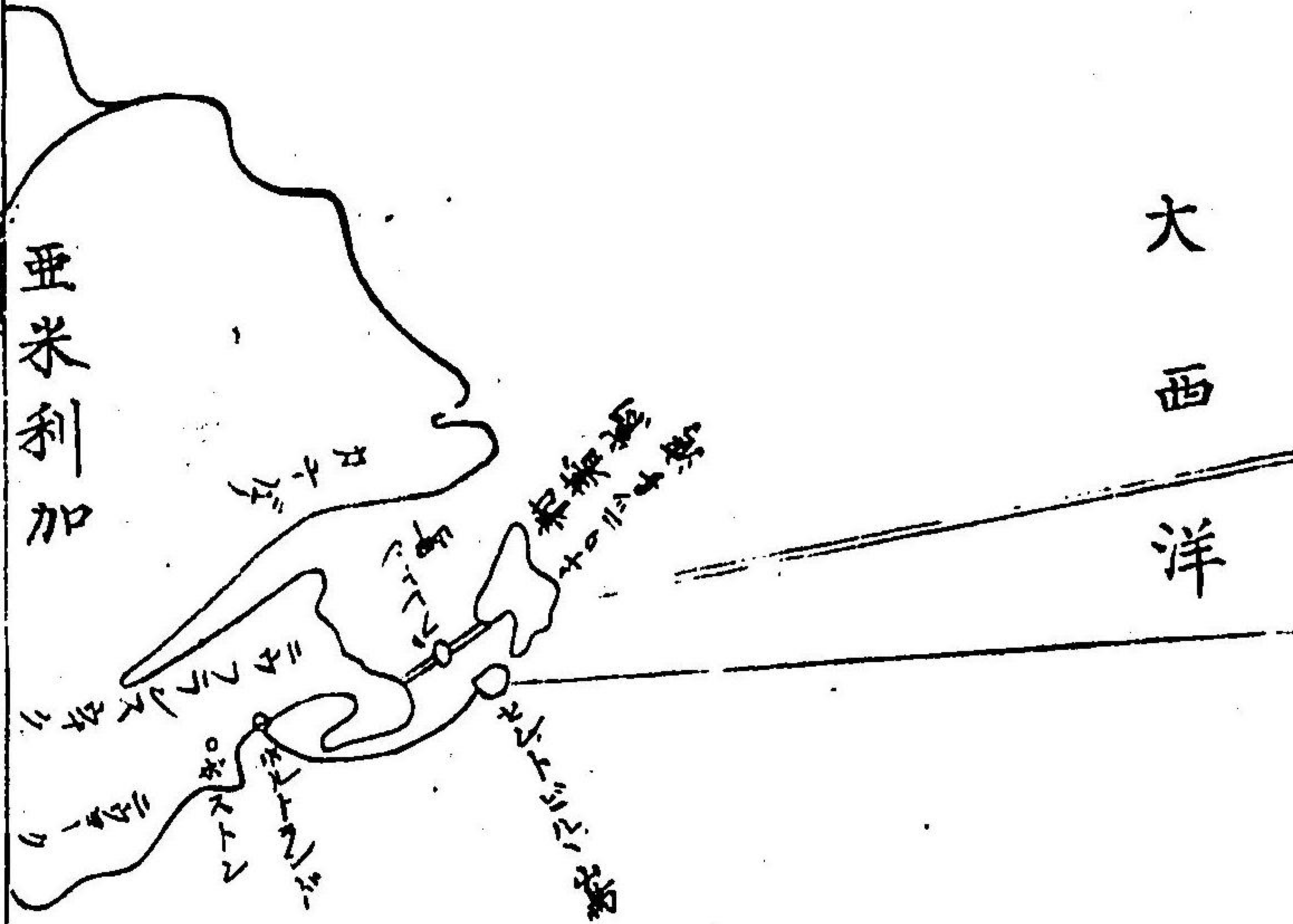


大西洋海底傳信機



故の鐘鎖を撈  
 出さん為種々  
 の奇妙な伝道  
 具を造り故鎖  
 を引張り処の  
 海底左右大凡  
 我が五里許の  
 間を探索り  
 かく竟る旧の鎖

の面



を尋出し直  
 之を修復を故  
 方今二線の  
 傳信機りて  
 英国と合衆国  
 との通信を便  
 利極る  
 一語一付  
 の價



英國の通用金一ポンド凡我グ三とを例へて英  
 國にて男子出産を亞米利加に在る人を知り  
 せんともふ時某男産といへば三語あるを以て  
 其賃九兩あり但し名當らぬも無賃のりのこと  
 を此の傳信機を海底に作るを以て途中にて妨  
 碍せしむる事あく音信の達せしむる最速は  
 九百七十五里の隔絶といへども三四分時  
 の間を達せしむるなり  
 佛蘭西國にしまし英吉利の例に倣ひ大西洋に傳

信機を置ると佛國政府より英國の政府に請  
 ひ英國のギリニツチといふ地にて英國の工匠を  
 雇ひ之を造り先尚機關匠數十人を雇ひ英國  
 此大船ダレート、井ーステルンを以て佛國の西  
 の海濱ブレストといふ港より西の方を發し大  
 西洋を越へ北亞米利加の東の海中に在る一嶋  
 セル、といふ佛國の領分を達し此嶋に傳信機  
 局を置き此より復し海底を経西に向て發し合  
 衆國の内マサキセツといふ國の海岸ポルトラ



ントと云ふ所は抵て止る其長さを英國の傳信機  
 の彼是倍よりして大凡我が千七百八十里其製  
 法は往年は英國にて造りしものと同様ありと  
 も其堅強ありと英國のものも倍と云ふ此  
 工我が明治二年五月に至て無事大成せし故  
 り方今を歐羅巴と北亞米利加との間は三線の  
 傳信機を以て日々數十回の通信を為し豈  
 便宜と云はんや亦其業絶大と云はんや  
 傳信機の途中は引張る銅線の大さ一分五厘の

物として造るを一秒時即ち脈一動の間は二萬五  
 千八百九十六里の距離を達し又六厘八毛の  
 太さの物にて造るを四方五千百九十二里余の  
 処に達せし  
 傳信機を斯く速くして急用は便利ありしもの故  
 り現今歐羅巴諸国亞米利加合衆国杯を設所  
 より役所まで或は本店より出店まで等銘々之  
 と造り空中より縦横の線を張るものと恰も蜘蛛  
 の網の如く互に新聞を報し緊要の消息を通ず



三等千萬里の人といへども座て對話もるが如  
 し日本もても東京町々より横濱までの傳信機  
 既に成りなほを或は田舎より東京へ仕入る来  
 まる商人も例へて洋布五十束求るんとは時  
 才が最寄の傳信機局へ到り只今横濱にて洋布  
 一束の直段如何程なるかを相尋烟草四五服の  
 時間待てて直に其返事来る斯く互に双方相場  
 を聞合さるゆゑ大なる直段違ふありまゝ入悪  
 謀事の疑惑をなし又横濱に在る人は急用あり

て對面せんときは時まつ日本橋の傳信機局に  
 到り横濱に在る何某も只今より高輪まで来る  
 登しと申遣りそのより高輪まで一里半許の間  
 歩行内は傳信機を既に横濱に届き横濱の人々  
 直蒸氣車に乗る七八里の長路を先は高輪に来  
 り相待居るべし実人間は羽翼を附多るが如  
 し尚長崎より支那の内上海までの海底傳信機  
 が出来たるよしを横濱より摂州神戸に至り  
 夫より長崎に至るまでの傳信機も近く成就す

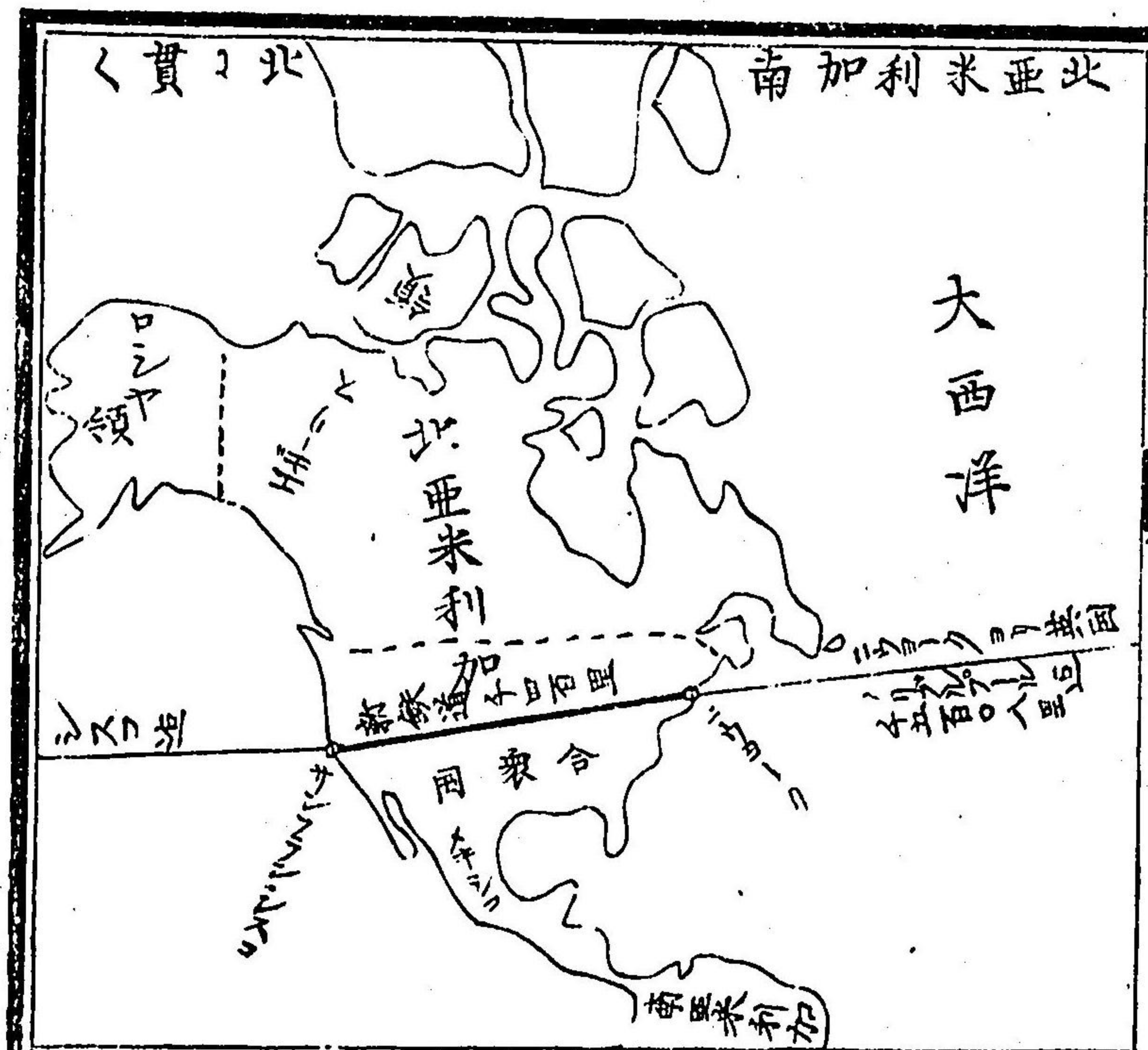


色<sup>イ</sup>左<sup>サ</sup>らぬ<sup>バ</sup>日本<sup>ニッポン</sup>東京<sup>トウキョウ</sup>或<sup>シ</sup>は横濱<sup>ヨコハマ</sup>振<sup>ヒ</sup>り<sup>テ</sup>英<sup>イギリス</sup>吉利<sup>ギリ</sup>  
 佛<sup>フランス</sup>蘭<sup>ラン</sup>西<sup>スペイン</sup>亞<sup>アメリカ</sup>米<sup>メ</sup>利<sup>リ</sup>加<sup>カ</sup>等<sup>ト</sup>へ座<sup>カ</sup>あ<sup>ケ</sup>る<sup>音</sup>信<sup>シム</sup>を<sup>通</sup>じ<sup>ル</sup>て  
 ま<sup>づ</sup>自由<sup>トヨウ</sup>あり<sup>例</sup>へ<sup>と</sup>東京<sup>トウキョウ</sup>より<sup>亞</sup>米<sup>メ</sup>利<sup>リ</sup>加<sup>カ</sup>に<sup>在</sup>る  
 人<sup>ノ</sup>急<sup>キ</sup>用<sup>ヨウ</sup>り<sup>し</sup>て<sup>是</sup>非<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>知<sup>ラ</sup>せ<sup>し</sup>や<sup>も</sup>最<sup>モ</sup>奇<sup>キ</sup>  
 の傳<sup>デン</sup>信<sup>シム</sup>局<sup>キョウ</sup>に<sup>至</sup>り<sup>其</sup>事<sup>コト</sup>柄<sup>カ</sup>を<sup>説</sup>き<sup>七</sup>八<sup>千</sup>の<sup>隔</sup>域<sup>キョク</sup>と  
 り<sup>ん</sup>と<sup>七</sup>三<sup>四</sup>日<sup>ヲ</sup>て<sup>其</sup>返<sup>ヘ</sup>來<sup>ル</sup>る<sup>を</sup>急<sup>キ</sup>し<sup>豈</sup>便<sup>ニ</sup>利<sup>ト</sup>  
 云<sup>ハ</sup>ん<sup>ヤ</sup>

○其五

北<sup>キタ</sup>亞<sup>ア</sup>米<sup>メ</sup>利<sup>リ</sup>加<sup>カ</sup>南<sup>ミナミ</sup>北<sup>キタ</sup>に<sup>貫</sup>く<sup>鑛</sup>道<sup>ドウ</sup>の<sup>事</sup>  
 亞<sup>ア</sup>米<sup>メ</sup>利<sup>リ</sup>加<sup>カ</sup>よ<sup>て</sup>鑛<sup>クワン</sup>道<sup>ドウ</sup>を<sup>開</sup>き<sup>し</sup>て<sup>今</sup>は<sup>一</sup>八<sup>百</sup>二<sup>十</sup>九  
 年<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>が</sup>段<sup>ダン</sup>々<sup>盛</sup>み<sup>あ</sup>り<sup>其</sup>後<sup>ニ</sup>二<sup>十</sup>二<sup>年</sup>歳<sup>サイ</sup>月<sup>ゲツ</sup>を  
 經<sup>ヘ</sup>て<sup>一</sup>八<sup>百</sup>五<sup>十</sup>一<sup>年</sup>に<sup>至</sup>り<sup>国</sup>中<sup>ニ</sup>所<sup>々</sup>に<sup>鑛</sup>道<sup>ドウ</sup>  
 道<sup>ノ</sup>長<sup>ナガ</sup>さを<sup>直</sup>線<sup>ジツゼン</sup>に<sup>ま</sup>する<sup>に</sup>凡<sup>オソク</sup>我<sup>ガ</sup>に<sup>四</sup>千<sup>八</sup>百<sup>十</sup>六  
 里<sup>ヨ</sup>余<sup>ヨ</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>又</sup>一<sup>八</sup>百<sup>五</sup>十<sup>三</sup>年<sup>ニ</sup>至<sup>テ</sup>て<sup>其</sup>長<sup>ナガ</sup>さ  
 増<sup>カ</sup>加<sup>ヘ</sup>て<sup>凡</sup>我<sup>ガ</sup>に<sup>六</sup>千<sup>六</sup>百<sup>五</sup>十<sup>七</sup>里<sup>ヨ</sup>余<sup>ヨ</sup>と<sup>な</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>二</sup>  
 年<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>鑛<sup>クワン</sup>道<sup>ドウ</sup>の<sup>増</sup>加<sup>カ</sup>と<sup>凡</sup>我<sup>ガ</sup>に<sup>一</sup>八<sup>百</sup>四<sup>十</sup>一<sup>里</sup>





と云又驚くべき  
 近來大西洋の  
 沿たる新約克  
 り大東洋の海岸  
 より東方西  
 哥とりの所まで  
 新の鑛道を造る  
 り一休亞米利加  
 の西部と高山大

鑛道日本日本の里の程



川多く嶮僻の地  
 勢よく人路と雖  
 びカリの間に開  
 る程の處ありし  
 が谷川よを鑛の  
 橋を架け或は山  
 を堀割り或は山  
 道を漸次上りよ  
 なく其最高き處



凡我廿二町五十七八間余すく降て谷  
 間に至り人蹟もあき荒地を拓き遂に新約克  
 より東方西斯科まで凡我が千四百里余の間  
 鑛道を敷き是世界第一番の鑛道ありと  
 扱鑛道りきバ必だ所々蒸氣車の建場ありて  
 此所にて下る人も上る人も又上る人も  
 日本道の如くは問屋場の如くあれども亞米  
 利加の鑛道は曲折ありけりバ歐羅巴諸国の  
 如く處々蒸氣車の建場を置ばし一車を以

て二百里より三百里位を走る故に甚だ迅速  
 して千四百里余の路程を僅に八晝夜にて行  
 けり且つ其車長大にして一車に客五十人  
 八十人を乗せ内より椅子などを備へ冬は温  
 室を設けたりと安樂なりと電車内と雖も家  
 室に居る異ならず斯く亞米利加の地を西  
 東まで貫透すを以て亞米利加中の往来ハ元  
 り日本の如き東洋諸国と北亞米利加或は歐  
 羅巴諸国との往来極て便宜あり日本より東



斯哥まで凡我ガ二千五百里の海上より二十日よへ至るを船く夫より蒸氣車よ乗り新約克よ至り新約克より英国のリブルプールとワム所まで凡我ガ千五百八里の海上を十二三日よへ至るべきまバ日本より英国まで太平洋路を往らむ凡我ガ五千四百八里の路程を四十日よへて至るべし又印度洋を往けバ五千六百八十里の長路を凡四十三日よへて達せむ一豈便速なり也 實よ此鑛道は世界中の人民に利益あり大

巧業とワム登し

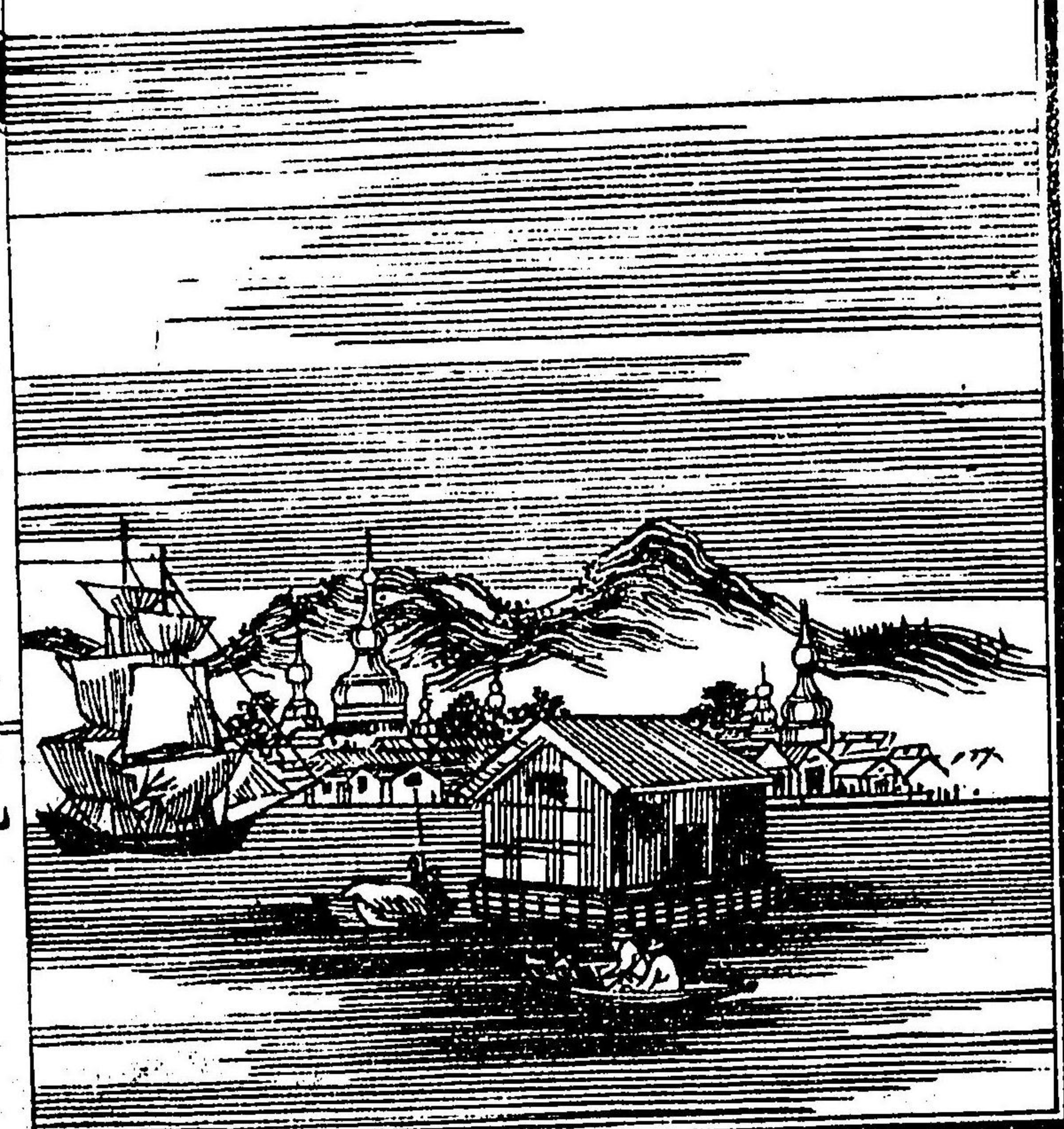
○暹羅の浮府

亞細亞洲の内後印度と称す邊は暹羅とワム国なり此国の首府は萬谷とワム府なり是各國の船の立寄場所とて随分繁華の大都會あり然るに此府半分はミナムとワム大河の岸にあり半分は其河の真中より至て其奇異あり余と世界中外絶て比まべきものあり旅人極えて一見



此廣大なる河の中央より大凡七萬の小家皆竹  
 して造りたる筏の上は造営を故に其家を水  
 流より随て上下は流動し宛て無数の大船大河  
 中の一叢として互に此船より彼の船へ水を與へ  
 或は彼の船より此船へ火を取り其用を便に  
 如く自在に動揺し始めて目撃する人々を真に  
 魂を冷し奇異の思ひをなすものあり  
 此河中に在る町家を皆奇麗に軒を並べ店を飾

萬谷浮府の畠



萬谷浮府の畠



り種々の奇品を商ふ又此町並の後ろより數十  
 間を隔てまゝ同トく數多の町家軒を並べ其間  
 々り河を即ち往還しして大小の船舶自在よ  
 往来して用事を便き又遙々壯麗の高塔三座を  
 眺望む是々此国往古より軍陣うら国政は抽あ  
 る名高き三人の玉の廟所ありと又それより少  
 々隔て小塔りり之々国王家族等の住所あり  
 とりふ  
 右手の頭此町の終る所より此河灣曲て再び此

町の後ろより流る此町家を皆小家ありと雖ども  
 甚だ奇麗なりして且清浄あり第一窓の邊より小  
 あは椽側を河の上より差出し影色よく所々客座  
 鋪を営み其傍より書見書き物等のたゞ脇部屋  
 を設け其後ろに寢室を設けりぐまも華麗な家  
 財道具を飾り家邊に小船を繋ぎ皆富貴の形粧  
 をかけ  
 此処に住居ありのら男女も遊を第一の勤  
 務とせ故に青年の内は必も遊を職業の如くは



思ひ入り斯く繁昌の河也大小の船艦通行繁く  
 随て大船小船は衝當て小船を沈没する事甚く  
 多し故は遊を知らざる者溺死するの害少  
 うらば今より二十年余前亞米利加国の「ミニス  
 トルベンハム」とりふ者小船にて出すが不幸  
 して大船と乘懸り其船沈没んで命を水中に  
 失ひりかゝる繁花の河ゆゑ往來の通船絶間  
 ごとく誰りて之を救ひ助けんとする  
 者もあらず空しく英雄を水中の阿伽と名を呼鳴

惜む登りとしへ

萬國奇談卷之二終



青木輔清譯

芝三島町

東京書林

和泉屋市兵衛

青木輔清

卷之二

四



世說新語

圖書室		599
三	三	
四冊	○號	二架七函

四本